

住田正樹・南博文編

『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』

(九州大学出版会、2003年)

田中治彦 (立教大学)

本書は1996年から2000年の5年間にわたって行われた「居場所」研究の集大成であり、さまざまな分野からなる24名の研究者によって執筆された460頁に及ぶ著作である。筆者は同じ時期に出版された『子ども・若者の居場所の構想』(学陽書房、2001年、以下『居場所の構想』)の編者ではあるが、このような大著を細部にわたってコメントするだけの力量もまた紙面もないので、大きく4点にわたって私見を述べさせていただきたい。

まず、本書のタイトルでもある「居場所」については各論者によってさまざまに説明されているが、序章にある次の説明が全体を包括する定義であろう。「安定的な他者との関係が形成されている一定の物理的空間が居場所となる」(7頁)、「『居場所』は主観的に意味づけられた[関係性-空間性]という一体化された形で捉えられる」(8頁)。この説明に従って「居場所」は「場所」と「関係性」の二つの軸によって4つに類型される(12頁)。本書の表題に「居場所」と並んで「対人的世界」が表現されているのもこうした理由による。

一方、拙著『居場所の構想』では居場所の条件について少し違う捉えかたをしている。高塚雄介は、居場所とは「空間的な『居』場所と時間的な『居』場所がクロスする所」に存在するものであるとし(36頁)、萩原健次郎は居場所の4条件のなかで「それは世界(他者・事柄・物)の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む」と説明する(63頁)。すなわち居場所の成立要件として、空間性、関係性ととも「時間性」を強調しているのである。というのは、居場所が議論され出した1980年代後半は、日本は明治以来の目標であった物的豊かさが可能となる成熟社会であり、その反面「進歩」の方向性を失った時代でもある。こうした時間展望の不確かさが子ども・若者にとっての「居場所のなさ」につながっていると分析した。そして、遠い将来はともかく近未来に対して信頼がもてることが居場所の条件であると主張した。本書においても第3章において時間展望について若干触れられてはいるが、全体における居場所分析の主要概念としては位置づけられていない。居場所の定義ないしは条件について、学会で大いに議論したいところである。

第二に「居場所のない子どもたち」分析について述べたい。これは第4章の補論としての位置づけしか与えられていないが、実のところ全編中で最も重要な役割を果たしている。なぜならば、居場所はそれが「ある」からではなく「ない」からこそ問題にされたからである。住田は、居場所のタイプとして家庭生活においては[家族-居間][友だち-居間][友だち-自室][自分一人-自室]の4つの型に分けて分析し、学校生活においても別の分類を行っている。こうした分析概念の抽出と分類の明晰さは住田社会学の特徴でもある。居場所のない子どもたちは、明らかに家庭生活、学校生活、地域生活の各領域で受容・承認されてい

ない、という結論が導きだされている。一見当たり前のようにみえる結論ではあるが、そのデータが豊富なことと類型分析が的確であるために説得力をもっている。

第三点として発達観の転換について議論したい。居場所が問題にされるようになったことと、近代産業社会の終焉とは無関係ではない。近代産業社会は、子どもの発達において「自立、成長、進歩、連続、目的性」などの価値を求めてきた。その反面「依存、障害、挫折、偶然、無用さ」などの価値を退けてきた（『居場所の構想』第4章）。こうした価値を補強したのが従来の発達心理学であった。現代若者の居場所問題の背景には、前者を「善」として、後者のような「影」の価値を切り捨ててきたことに一因がある。従って居場所研究を行う際には、従来の発達観を根底から疑って、新しいパラダイムを提起するくらいの覚悟が必要である。しかしながら「第8章 幼稚園・小学校・中学校における居場所の成立」「第11章 青年期と『居場所』」での論述は従来の発達心理学の枠組みのなかでの分析であり、現在の居場所分析としては成功しているようには思われない。今後、心理学においても近代産業社会の価値を内包したままの「発達観」および「発達心理学」の前提を問うような居場所研究を期待したい。

最後に、居場所研究の方法論について言及したい。居場所研究の分析手法において有効性が高いと感じられたのは、3章、7章、10章、12章であった。これらの章の執筆者は環境心理学、人文地理学、建築計画学といった「空間」を扱う諸学である。例えば、園田・南は第3章で「流動性が高い社会において、居場所として質感をもたらす場所パターンを抽出する」ことで「居場所デザインへの可能性が開かれる」と述べ、居場所研究とデザイン化のための方法論として注目すべき議論を行っている（96頁）。2章の「身体イメージ」もユニークな論功であった。さしずめ本書は居場所研究をめぐって、さまざまな学による誌上シンポジウムの観を呈しており、今後の居場所研究の出発点とも言える内容になっている。